

むかしの二年生と、どうちがうの

父母、地域と共同の子育てが大切！

高橋 武昌

一、一年生のとらえ直し、父母、教師、学校の
とらえ直しを！

(1) なぜ、ごみをひろわないの？

ごみをポイと床に棄てるA男ちゃんに、「どうしてごみそこにすてるの」と言うと、誰の話かという顔をして「ぼく、おとしてないもん」と言う。そこで「今、きみが落としたんだよ、ひろってよ」と言うと、「どうして、ぼくがひろわなければならないん」と言いだすしまつ。この後、しつこくA男ちゃんに迫っていくと、誰の目にもイライラしてきて投げやりになる状

態が分かる。キレル寸前まで追いつめては意味がなくなるので、荒れていく子どもの心を静めるのが大切。こういう子どもには、昔はあまり出会ったことがない。最近、とくに目立つ状況をどう考えたいのだろうか。ポイと床にごみをすてる子、そして注意されて拾わなくてもいいと言いつ張る子の心情に立ち入らなくては教育は成り立たない。このA男の家を見てみよう。妹と二人で毎日夕方五時半ごろまで母親の帰りをまっている。父は夜おそく、時には母親も七時頃の帰宅もある。朝はみんなが七時すぎまで寝ていてA男は、一人で朝飯を食べないことには学校におくれてしまう。アパートを一番はやく出るのはA男だとすると、朝の

家族の会話も、その日の学校へ持っていくものの準備や家庭学習も人間らしい満ちた食事、ごみばこのあふれたごみの始末もみんな素通りした生活のフレームをみることが出来る。実は、このフレーム自体が斜めにゆがんでいるのに「自分でおとしたごみはちゃんと拾いなさい」等という言葉でA君の体は受けとめることはできないのだ。

どこの家も、このような状況とは言わない。しかし確実に多くなり、きちんと出来る子との差が大きく開いて二極分化している状態を、すでに一年生の子どもの日々の学校生活で見ることが出来る。

(2) こんな生活じゃあ意欲なんか湧くもんか

一年生が授業中、居ねむりをしたり、居ねむり状態の静かな姿を見て「へえ、やっぱり学校は疲れるんだなあ、一年生ってかわいいな」なんて牧歌的な言い方もできるのかもしれない。逆に、朝始まって帰るまで授業中におしゃべりをしつづけている子もめずらしくない。昨年の一年生は、ポケモンの一五〇種の名前を授業中、お経のようにとなえたり、常にとり近所の子に話しかける子が目立った。「やめなさい」という

と三十秒ほどは静かになるが叱責は効果なし。

居ねむりする子としゃべりつづける子の共通項は何だろうと様々調べてみた。そのひとつに、双方とも就寝の時刻が大変おそいことであった。大人の番組のテレビをずつといっしょに見て蒲団に入るのが十時半すぎ。夜は家族全員が最も元気になり解放され気分もより上がりテレビをおそくまで見ていても九時には蒲団へ……などとケチなことは親も言うまい。

研究所のこの度の調査にもあるように、一年生の24%の子が夜十時以後の就寝、26%の子が朝七時すぎの起床となつてゐる。即ち、私のかかわる一年生でいえば、クラスの四分の一の子は、子どもの発育にふさわしい生活のリズムではない。そのために様々な問題を生みだす要因のいくつかになつてゐるようだ。このことを私は単純に親の責任とは言わない。朝のおき方や就寝時刻のことを親に言つて直るようであればすぐ言うが、一朝一夕で直ることではない。多くの核家族が、父母の労働条件が、大人のつくりだす文化環境が、日々の命を育てる食事が、担任にたまたまなつた教師の一言でつくり変えられるようであればことは簡単。

そうならないところに矛盾として現れた現代の子育



て教育の課題があるのであり、それを、父母と共に共通認識に高め、それぞれの立場で実現していくとき子どもの発達、変革は見えてきて、そのことで喜びを分かちあえるのである。

ついでに、一年生の排泄のこともつけ加えておこう
七月始めのある日の調査だ。

きのうは、いつ排泄をしましたか

朝98名 学校6名 放課後25名 夜16名

しない子16名

といった具合。体を動かし、活動しはじめると排便が始まり、放課後、夜になると通便する。これは、大変他律的なリズムと言っている。交感神経と副交感神経のバランスがくずれ、その矛盾が、最も集中力を必要とする学校生活で問題になり、体自体のイライラが仲間の中に持ち込まれ、朝のバランスとれたエネルギーのもとになる食事が欠いているため意欲でもないということは当然考えられることだ。文部省が、道徳教育を説き、心の教育を説き、よい子像を求めていることは、最も貧困な状況に子どもをおしとどめていることだと思っている。

私は逆手にとって子どもと親に迫る。生活科で、「自分のおいたちをしらべよう」という学習の時、クラス全員にこんな宿題を出した。

「今晚のテニ一の九時から始まる番組『小さな小さなあなたを生んで』を見てください。おうちの人のいっしよに最後まで見ることが宿題です…」と。

このテレビ番組は第19回ヒューマンドキュメンタリー大賞を受賞した唐木幸子さん原作のドラマである。生まれた時、たった六七八グラムだった超未熟児を父母と医療スタッフの力で無事育てる感動のドラマだが、次の日、どの子も「すごくおもしろかった」とか「泣いてしまった」とか言っていたが、時にはこんな眠い目をして見るテレビもあるが、普通ははやくねて、自分の勉強をしつかりやり、考えあおうと事実で教えたわけである。ある父母からの連絡があった。

「昨夜、十一時まで、家族で『小さな小さなあなたを生んで』の番組を見ました。近ごろ『感動する』ということを忘れていましたが、久々にいい番組に出会えたと思います。息子も眠い目をこすりながら見てました。いつも時間に追われ、感情のまま叱りつけたり、言っではいけないことを口にしてしまったり…。忘れか



けていた気もちというか思いというかを思いださせてくれた貴重な番組でした。まだまだ未熟者ではずかしい私ですが、先生といっしょに子育てに努力します」生活科のおいたちの記録学習も父母の協力で一層楽しいものになっていった。

(3) 明るい素直で元気な子：だーいすき？

「○○ちゃん暗いわねえ」なんて言う大人や教師は明るいい子、暗い子と区別しているのではないだろうか。明るいい子、暗い子と見る見方は、大人や教師の前では、ハキハキと愛きょうを振りまく大人用の子どもが好きなのに依拠するかもしれない。従順な子は大人に受け入れられ、疑問を持ったり時にはきっぱり反抗する子が嫌われる例はないだろうか。

私たち大人・教師の子ども観をもう一回見直してみたい。かっこつきの道徳教育だって、ひまわりを「ひまわりさんかわいそう」と言ってる生活科だって、知識はバラバラに身につけ、ものごとの本質に迫る学習内容を例示しない指導要領も、実は「明るい素直で元気な子」像から来ているのではないだろうか。一人一人がバラバラ勝手に自分なりに学習し、大人に好かれ

ような子ども観を、低学年のころからしつかり見直していくには、大人・教師の目が大切である。

「すばらしいことや美しいことに感動する子、他と交わり能力を発揮する子、自己を肯定し、他を認めて生きるやさしい子、何にも挑戦し、すこし位のことでもへこたれない強い体の子」を一年生からめざしていかななくてはならない。

入学してまもない子ども達の絵を見ると、ごちゃごちゃして何が何だか分からないものがある。そのような例が大変多くなっていることも事実。ことしの一年生は絵がへただ、だから絵のかき方や空間認識の力をつけなくちゃ、などと言うまえにやる必要がある。

絵を描けない子の多くの例は、絵にして見せる対象者（教師・保母・親）との人間関係ができていないからだということも言える。教師に絵をかいて見せる、教師によつて認められる、教師によつて励まされる関係こそが大切なのであって、技術を教え、方法を教えてうまくなるものでもなさそうだ。

家庭においては、テレビなどがじやまして、子どもがかいた絵を仲介にした親と子の関係が断たれている例もある。絵はおしゃべりであり、綴られた文である



と見て、人間的な交わりを深くしていくとき絵はどんどん変化していく。

他との交わり能力を発展させる場合は学校で山ほどあるのに、あんな絵をかくB子ちゃん、心が荒れている、幼すぎる、冷たい子だ……と見られてはどうすることもできない。私は、真壁仁の詩を口ずさむ。

この子らのために

窓をとざしてはいないか

みちをふさいでいないか

この子と生きるよろこび

この子らにわたすしごとの

用意はいいか

地平をひらこう

この子らの未来のために

学ぶことをちょっと忘れて偏ってしまう自分、弱さから逃げようとして荒れるような心の自分、疲れて明日のことを考えようとせず、目先のことにだけこだわるその日ぐらしのような自分に言いかけせる詩がこれである。至らない自分を励ましてくれるもののひとつである。

(4) 「学校は最高に楽しいところ」でおきる苛立ち

決して広いとは言えないマンション・アパート住まいの多い地域、一歩屋外にできれば、駐車場と大人の遊び場だらけの地域。自転車のはだめで、かくれんぼすれば犬の糞だらけの公園。よその家の庭で遊べば、学校に抗議の電話がくる校区……そんな地域でも学校に来れば、広くてきれいで安心してくらせるし、今までつきあったこともない様々な友だちがいっぱいいる。いっしょに遊んでくれる子もいるし、ちよつといたずらするとすぐ泣く子もいる。悪口いうとおっかけてくる上学年の子もいる。こんなに楽しいところはないのだが、またトラブルや混乱も日々生じる。だから、ちゃんとしゃべれる力が必要だし、自分の気持ちをしっかりと綴る力もいる。みんなで討論し結論をだし守ることだって必要になる。学ぶということを実感できるのは、まさに低学年からである。

母国語である日本語の系統と内容を初めて学習するのが一年生である。ゆつくり豊かに順序よく習うこの時期に、沢山の内容をおしつけている（かたかな、漢字等も）指導要領も大変問題である。「ゆつくり」と「豊



かさ」と「順序」を保障するものは、やはり学級規模がひとつある。30人もいる学級と、18人の学級では大きな学力の差がでてくる。前者の学級では、「はやく」「効率的で」「バラバラ」の学習におちいりがちで、教師の姿勢、教え方に問題があると自問する教師がいるがそれは一面的である。

父母とこのことを正面から語りあい、30人以下学級の実現のために努力しあう共同の力が求められている。子ども父母の当然の要求がゆきとどいた教育であって、教師の教える時の都合で30人以下学級を言うのではない。

一方、指導要領でさし示す内容を問題があるからといって教えないのではなく、問題はあるにしても子ども達にきちんと豊かに教えていくおもいをこらしていくべきである。

例えば漢字学習で言えば、私は、圖の形を具体化してしっかり教えている（―よこせん　―つりばり　―ななめかぎ等…）次に漢字の書く順序をものにとえて教えている（上から下へ、左から右へ　つらぬくたてせんがあと…）以上はとても効果的であった。ある日「門」がでてきたので自由に漢字づくりゲームをやって

みた。

関（あさ）関（でぶ）関（こわれる）関（おしっこ）関（かえる）関（あける）関（はえる）関（こうもん）関（きく）…「えっどうして門に口をかいてきくの」というと「だって友だちの家の門のところであそぼうと口できくから…」という。「うん、C男ちゃん、あなたはずーい。中国で四千年前、かん字を発明した人もC男ちゃんのように考えてつくったんだ。問という字いま、日本中の人が使っているんだよ。すーい発明だねえ」と言った。子ども達は、漢字が大好きにくどんどん書いていつている。ドリルを何回もくり返す前にやることがあるのである。

二、一年生はどこからどう育てられるか

(1) 自分を知る、そして表現を

一年生には、まず他に働きかけるおしゃべりをいっぱいできる子にしたい。好き勝手なことではなく、だんだん自分の言いたいこと、しゃべりたいことをふやしてあげみんなで認めあうことから始める。



■ たかはしせんせいカブトムシのようちゅうかつたんだよ でっかうんちをたくさんするんだ ぼくはふんとりをしたよ (さくも)

■ こんど しゅんくんはどうしてけがしたのかきいてください (友だちのけがをみて) (あやか)

■ たけのこせんせい いつもえいすけがにいじわるします そしてけんたがいじわるします (てつや)

■ せんせい しんばいしないでねあといつししょうけんめいがんぼつてね りっぱなせんせいになつてね

(私が、字の書き順序みちがえたので) (こう)

■ たかはしせんせいへ

せんせいなんで あたまのさきぼあたりがかみろけないの (上がはげているので) (よしひろ)

■ ぼあちゃんは94さいだよ みんなでかけちやうとぼあちゃんはさみしくないのかな それがしりたい みんなぼあちゃんのきもちわからないのかな ぼくはさみしいとおもう (だい)

■ さんすうのてすとが60でんだったから おかあさんがおこったんだよ わたしはできなかったんだよ わたしもいっぱいおこったよ もうわすれたいきもちです おかあさんすぐおこるんだからいやだなあ

(まいこ)

子どもの書いたものを文集にしてみんなに配り、よみあい、自分の気もちを言わせてきた。回を重ねることに子どもは、文に書かれている「ねうち」に気づいていくのである。

一年生に入学した日に「うんこ」の話をする。「みなさんあすから車に気をつけて元気で来るんだよ。お願いがあります。朝うちでちゃんとうんこしてくることに！」入学したばかりの子と、うしろにならぶお母さんたちもげんそうな顔である。

「ところでみなさん、いいうんこって知っている？」というと笑いだす子、バカにすんなという顔の子、きつたねえと言いだす子と様々である。そこで、「いいうんこはバナナ、わるいうんこはほしぶどうとソフトクリーム」と言つて絵を見せる。「あのね、あすからこういうふとーいいい色の長いうんこをしてくる子、先生だーいすきだ！」と言う。

次回より毎日、排便のようすを調べるようにすると子どもは、とてもまじめに排便にとりくむ。朝排便する子がふえてくるし、「先生、きょうの朝、とてもいい

うんこなのできもちいいよ」という子がでてきた。「先生、きょうぼく調子すこしわるいんだ。だつてうんこへん。きのうのよるババが十時ごろ出張から帰ってきておみやげのささかまぼこ三本たべたんだ。だからきょうはへんだよ」と自分の体のことや生活をつなげて言えるようになってきた。まさに子どもは、自分の体の主人公になってきたようだ。

以上の例は、学級づくりの基本。「勉強しよう!」と入学するなりいき込む子どもが目立つとき、文を書くことや体のことでじっくり時間をかけ人を追いこすことばかりにがんばるのでなく、人のしたこと考えたことに関心を深めさせ、そして、自分自身を見つめことばや形にしていくなか気持ちをふくらませたいものである。

(2) 国語も算数も事実・具体物とつきあわせて学習を
していく

かな文字指導で「ん」を扱っているときである。この時間は、まず教室に入ると一人に二こずつ「ぎんなん」の種をわたした。

「まず、この二つのもののけんきゅうをしましょう」というと、様々なお話がとび出してきた。

「これなーに」

「これ、種じゃん。知っているよ」

「くるみでーす」

「ぎんなんでしょう、先生」

「あたり、そう、ぎんなんです。これは種というもののようです。はい他に知っていることは?」

「先生、これ割ってなかをみたーい」

「これ、りょうりにつかうよね」

「じゃあ割ってごらん」

ぎんなんを割った子は、さっそく口へ。苦くてくさいぎんなんを投げすてる子もいる。そこで、「今日は、このぎんなんにことの勉強をします。はい、いくつの音でできていますか」。

●●●●●四の音でできている単語だということを確認させ ●●●●●○の○の音の文字を学習することを告げた。

「先生、んの字書けるよ」

「ぎんなんって、んが二つついてるね」

そこで「ん」を書きたがりやに書かせて見せるのだが、

「ん」「ん」「ん」等で、自己流である。

「あのね、江南小学校の『ん』は、むずかしいのだ。」



しつかりおぼえてね」と言うとき集中力が増す。

「さあ『ん』の音は、こうかきます。はなからぬける音だよ。ていねいに書いてごらん」。

んの練習してから、「ん」の音のつく単語さがしに入った。はんこ ごはん ももんが…というように「ん」の音が、様々な場所につくことも教える。はんこは実物で（みんなのノートにハンコをおしてやる）。ごはんももんがは、絵写真で示し、教えてやることができる。授業のさいごに「今日は宿題があります。このぎんなんを家にもっていつて煮るかやくかして食べてごらん。これが宿題です」と言う。

町田さんは、「きのう、ぎんなんだんごをたべました。あまくておいしかったよ」と書いてきた。彼女は、家で串にさしてフライパンの上で、ぎんなんを焼いて、たべたようだ。ぎんなんの実物にふれる、ぎんなんという単語から「ん」を抽出。音の「ん」を、表現する文字にさせる正しい「ん」の書き方を知る。

さらに「ん」の音の使われている単語をさがす…ことを一連に学習する。音と文字をしつかりつなげ、実物を通して両者の関連を知り認識していくことがとても大切である。

(3) 豊かな遊びと学級づくり

おしゃべりも好きだが、遊びも大好きである。

遊びは、

ア、一人ぼっちをつくらないでみんなでいつもワイワイ
イ言って遊ぶこと

…何と言ったって教師が中心になって遊びをすすめることである。体をふれあったり走りまわったり、いっしょに輪になってゲームをしたりすることである。

イ、授業でも、ことばあそびもいっぱいとり入れる。

とくに、谷川俊太郎、まどみちお、マザーグースなどの詩も大好きだ。

手・目・耳・体を使った遊びも大切で、低学年であればすこしの時間でもゲームで知恵をしぼらせ、友だちとかかわらせ、手をしなやかにしなくてはならない。エ、給食の時間もゲームで。「今日の給食の品目をぜんぶ上げてみよう」といって一人ずつ順に給食に入っている品目を発見させます。

にんじん（パンパン…と手をみんなでたたく。次の人が）トウモロコシ（パンパン）ハクサイ（パンパン）しょうゆ（パンパン）…ずつとつづけると三〇品目はゆう



に発見してしまう。

オ、学級全員の財産をつくる

去年の一、二年生にはしうぎを全員に教えた。本しようぎなので、始めはすこし抵抗があったが、子どもが子どもに教えどんどん上達していった。

五、六年生の達人を昼休みにきてもらって相手をしてもらった。日がすすむにつれて、一年生に敗ける五、六年生も出てきた。二年生は、図書館や雑誌の詰めしうぎを教室でやり始めた。家に帰ると、とにかく、父母、祖父母に相手をさせる子どもが多くなり、連絡帳でその様子を私の方に書いてくるお母さんもいる。

学級のしうぎ大会もやったが、みんながやっていると、敗けてへそをまげてしまう子もあり目立たなくなり、又、挑戦しはじめる。よく友だちを相手に試合をしたり、やり方をきくようになった。クラス全体が、大きなかたまりになったようであつた。授業もとてもやりやすくなつていった。

(4) 父母との共同の中で

食べることの意味を父母と共に考えてみた。

一日三〇品目の食品がとられているか調べる用紙を

全員に配り、朝・昼・晩の食事が何点になるか調べさせた。五〇点以上だと合格、四〇点以上だとやや満足、二〇点以下だと食生活に不安あり・・・というもの。学校給食は、家で思いださせて記入させると完全に五〇点以上。子どもたちの家では、三〇点、四〇点・・・様々だ。

父母に食事はどうあるべきか理屈で言っても仲々わかってくれないが、品目しらべでは、いかに新潟市のいまの給食がすぐれているか、意外に偏っている自分の家の食事を見直すきっかけにもなつていった。

学級こんだん会は、こういう実践のあとテーマはあつてのずと決まつてくる。みんなが自由に深く語りあつて

(たかはしけまさ・江南小学校)

